

## 佐賀市長・石丸勝一と北川家資料について

串 間 聖 剛

## 一、はじめに

石丸勝一（いしまる・かついち、嘉永四年（一八五二）～大正十一年（一九二二））は、明治時代に第二代（一八九二～一八九六）、第五代（一八九九～一九〇五）、第六代（一九〇六～一九〇九）の佐賀市長を務めた人物である。資産家・実業家でもあり、佐賀市教育会会頭や神埼実業銀行取締役等多くの肩書きを持ち、政治家としてだけでなく、教育・経済界においても明治・大正期に活躍した人物といえる。しかしながら、これまで石丸勝一については、『佐賀市史』『佐賀市議会史』、中林梧竹の研究<sup>①</sup>の中でその名が散見されるのみであり詳細は明らかにされていない。

佐賀県立図書館では、平成十九年度より「図書館先進県づくりステップアップ事業」の一環として未整理資料の整理を進めており、佐賀大学地域学歴史文化研究センターと連携し、石丸勝一に関する資料群「北川家資料」の目録作成の為の整理を実施した。今回は、整理の進行状況及び資料の概要について報告を行ったが、本稿では、その後の調査結果により判明した石丸勝一の経歴及び、資料の構造について報告を行うこととする。

## 二、石丸勝一の経歴

本項では石丸勝一の経歴を、活動内容により七期に分類した。まずは後の活躍の基礎となった佐賀市長就任以前の活動として「出自・誕生から青年期まで」、「青年期から萩の乱による投獄まで」、「釈放後から佐賀新聞社創立まで」の三期を、次に政治家として延べ二十年にわたって務めた佐賀市長時代を三期、最後に市長退任後に活発となった実業家・文化人としての活動及び晩年について述べることにする。

## (一) 出自・誕生から青年期まで

石丸勝一は、佐賀藩足軽・石丸善助と妻・モンの次男として、嘉永四年（一八五二）一月十一日に佐賀城下道祖元町に生まれている。父親の善助は、明治七年（一八七四）の戸籍届によると土族・石丸久兵衛の養子であり、実父は道祖元町平民・松尾弥右衛門である。弥右衛門は松浦郡桃川村（現・佐賀県伊万里市）の生まれであり、二十才の頃より佐賀へ出てきて奉公人をしてしたが、大病を患い貧家になったとされている。そのため善助は十一才より商売を始め、三十一才の時に石丸家の養子となっている。家督相続後は、煙草屋の経営<sup>②</sup>の他、反射炉用の白炭廻送などを行っており、

石丸家は善助の商売により財を蓄えたのではないかと考えられる。

このような環境の中、勝一は安政四年（一八五七）に七才で城下向町の宮富塾に入学、慶応元年（一八六五）には草場船山の塾へ、次いで慶応三年（一八六七）には獨行小路古賀竹堂の塾・高尾宿重松春香の塾に通うなど、学問の研鑽を積んでいる。さらに維新後の明治四（一八七一）七三）には、肥後・日向の間を遊歴しており、その後の活動の基礎となる経験を得たと思われる。

## （二）青年期から萩の乱による投獄まで

明治七年（一八七四）二月、江藤新平・島義勇らを中心にして起こった佐賀戦争では、征韓党・憂国党の佐賀士族約一万人が参戦しているが、勝一もこれに加わっていた。ただし、多くの士族とともに「無構」（無罪）と<sup>3</sup>なっている。同年九月には、父・善助の死去により二十四才で石丸家の家督を相続し、同郷の先輩である副島種臣・大木喬任に従い京阪・東京の間を遊歴し、各県士族と交わり国事に奔走している。

この時期、勝一は征韓論の思想をもっていたようである。同郷の士族・家永恭種<sup>4</sup>は、明治七年十二月に司法省を辞職すると、翌明治八年（一八七五）に起こった江華島事件を受けて朝鮮出兵を提唱した。この時、山口県萩の佐世一清<sup>5</sup>らが家永を訪ねてきており、その会談に勝一も同席している。佐世は朝鮮出兵の建白書が失敗した場合の決起を説いたが、家永・勝一ら佐賀士族はその話に乗ることは無かった。しかし、明治九年（一八七六）に萩の乱が起こるとその関係を疑われ、家永らと共に長崎桜町監獄に投獄されることとなった。無関係であることが認められ、ようやく保釈となったのは翌年の春のことであり、正式に無罪が確定したのは西南戦争後

であった。その後、勝一は佐賀の産業発展に尽力していくこととなる。

## （三）釈放後から佐賀新聞社創立まで

萩の乱による投獄と同年の明治九年（一八七六）、勝一は「松風社」という佐賀の法律研究団体に参加している。そこで法律研究の傍ら社務に従事している。また、勝一は秩禄処分により家禄を失った士族を救済する「士族授産事業」にも関わっている。明治十五年（一八八二）には、政府に請願していた起業資金十一万円の貸与が許可され、佐賀に於ける士族授産結社「授産社」を設立、同社の幹事となっている。授産社は主に佐賀郡及び小城郡・西松浦郡の沿岸埋築事業を経営し成功を収めたようである。現在、佐賀市東与賀に残る「授産社塙」は、その名のとおり明治二十年（一八八七）に授産社によって造成された塙のひとつである。

授産社設立の翌年、明治十六年（一八八三）には、家永・友人の江副靖臣<sup>6</sup>と共に活版会社「尚友社」を設立、さらに翌年には、江副・西村萬次郎・野中萬太郎らと発起人となり、尚友社内には「佐賀新聞社」を創立した。勝一は副社長兼印刷人となり、官庁関係記事の充実や読者の投稿欄設置などの新しい企画を次々に採り入れている。また、木版刷りの絵画入小説を連載するなど大衆相手の新聞作りを行い、発行部数を急速に伸ばすことに成功している。

## （四）佐賀市助役・市長（第一期）時代

明治二十一年（一八八八）に市制・町村制が公布されると、翌年の実施に向けて全国で合併など新制度に対する議論が行われた。佐賀においては「町制派」と「市制派」との間に論争が起こり、紆余曲折を経て、勝一・家

表1 石丸勝一年表（※年齢はかぞえ年）

年月日	西暦	年齢	出生	出生地	事由
嘉永4年1月11日	1851	1歳	佐賀藩足替・石丸勝助、モツの次男として出陣元配に生まれる(弘化2年 移住)	佐賀県	
安政4年春	1857	7歳	向明宮富孫に入学する(履歷書)		
慶応1年春	1855	15歳	草場船山の塾に通学(～慶応2年まで)(履歷書)		
慶応3年春	1857	17歳	羽行小宮吉竹先生の塾・高良直重塾生春の塾に通学(～明治2年まで)(履歷書)		
明治4年	1871	21歳	慶応・日向の間を遊歴する(明治6年春まで)(履歷書)		
明治7年	1874	24歳	佐賀の日に参加する。廻遊は「無明」(田村貞雄 秋月の乱における他地域士族との連携)		
明治7年9月	1874	24歳	石丸家の跡を相続する(履歷書)		
明治7年	1874	24歳	同郷先輩の副島・大木に会い、京坂・東京の間を遊歴し、各県の志士と交わり国事に奔走する(～明治8年まで)(履歷書)		
明治8年	1875	25歳	江華島事件後の朝鮮出兵を砲撃した家来恭輔と幕藩士・佐一将らの余談に同席(田村貞雄 秋月の乱における他地域士族との連携)		
明治9年	1876	26歳	法政研究団体「佐賀松風社」に入社し、法政研究の傍ら社務に従事する(履歷書)		
明治9年冬	1876	26歳	秋月の乱・表の乱で嫌疑を蒙り、長崎第一監獄に投獄される(履歷書)		
明治10年春	1877	27歳	家来恭輔らとともに保釈され佐賀に戻る。西南戦争終結後に無明宣言を受け、佐賀藩・小坂部・西松浦藩の治世復興事業を行う(履歷書)		
明治15年	1882	32歳	政府より土族投資の起業資金の監督を受け投資社を設立。同社幹事となり、佐賀藩・小坂部・西松浦藩の治世復興事業を行う(履歷書)		
明治16年	1883	33歳	佐賀・家来恭輔・友人・江副貞とともに佐賀市内において活版社「高友社」を創立し主宰となる(履歷書)		
明治17年6月	1884	34歳	西村貞忠・江副貞・野村章太郎とともに総起人となり佐賀新聞社を創設、副社長となる(佐賀市史第三巻)		
明治17年11月14日	1884	34歳	佐賀新聞社上においていせつな記事を執筆したとして児玉公蔵とともに佐賀新聞社事務所(御念10月)に処せられる(佐賀県近代史年表)		
明治20年6月21日	1887	37歳	熊本で開かれた九州政進同盟委員会(石丸勝一他、村岡政道、伊月文右衛門ら15名)として出席(佐賀県近代史年表)		
明治20年6月24日	1887	37歳	熊本で開かれた九州政進同盟委員会を取材(佐賀県近代史年表)		
明治20年7月26日	1887	37歳	福岡県でともに、家来恭輔前佐賀藩前佐賀市長の復任諮問委員となる(佐賀県近代史年表)		
明治20年8月1日	1887	37歳	熊本前佐賀藩長復任諮問委員として熊本赴任とともに上京(佐賀県近代史年表)		
明治22年5月30日	1889	39歳	佐賀市助役就任 年齢50才(佐賀市史第四巻)		
明治23年2月4日	1890	40歳	佐賀市助役として佐賀市水道計画に携わる(佐賀市史下巻)		
明治23年頃	1891	41歳	助役として佐賀市水道計画に携わる(佐賀市史下巻)		
明治24年4月3日	1891	41歳	助役として横尾佐賀部長とともに小倉招集祭に出席(佐賀県近代史年表)		
明治25年2月26日	1892	42歳	佐賀市助役就任 勤続年数2年9ヶ月(佐賀市史第四巻)		
明治25年2月26日	1892	42歳	佐賀市長就任(一期目) 年齢50才(佐賀市史第四巻)		
明治25年6月3日	1892	41歳	榊山實雄佐賀県知事とともに田城内の倉永文長らの遊覧を視察(佐賀県近代史年表)		
明治26年3月2日	1893	43歳	北白川宮を未許知事、龍岡警察長とともに講堂まで出迎える(佐賀県近代史年表)		
明治26年6月	1893	43歳	日本赤十字社総会に佐賀県総代として出席のため上京(佐賀県近代史年表)		
明治26年6月	1893	43歳	商法施行条例第三十五条により服官職人を命ぜられる(履歷書)		
明治26年9月	1893	43歳	貸見免立を計画する(佐賀県近代史年表)		
明治27年5月	1894	44歳	京都市の選部大祭委員編任に任命される(佐賀県近代史年表)		
明治28年2月24日	1895	45歳	役員改選により佐賀市教育委員会に就任(佐賀県近代史年表)		
明治28年8月20日	1895	45歳	県よりユリシラの校役官に任命される(佐賀県近代史年表)		
明治28年12月	1895	45歳	佐賀市内の武芸者らに大日本武藝会への参加を呼びかける(佐賀県近代史年表)		
明治28年12月13日	1895	45歳	市吏員の編島家守付金儲額四年により佐賀市議会に辞表を提出する(佐賀県近代史年表)		
明治29年頃	1896	46歳	佐賀市助役(一期目) 勤続年数4年(佐賀市史第四巻)		
明治29年2月	1896	46歳	正主事において佐賀への鉄道敷設の趣意を表明(諸新聞史)		
明治29年2月25日	1896	46歳	明治27・28年事件(日清戦争)の功により金100円を下賜される(履歷書)		
明治29年3月	1896	46歳	佐賀鉄道会社の創立委員(石丸勝一他、伊丹野村大、澤川文十ら8人)に決まる(宇野阿史)		
明治29年3月10日	1896	46歳	佐賀藩行有志より黒旗隊輔士として推薦される(佐賀県近代史年表)		
明治29年3月	1896	46歳	商法施行条例第三十五条により再び服官職人を命ぜられる(履歷書)		
明治30年7月	1897	47歳	台湾鉄道会社創立委員長の職任により渡台し、同社台北事務所総務となる(履歷書)		

年月日	西暦	年齢	出生	出生地	事由
明治30年8月24日	1897	47歳	娘・さちか急病でカタルにより死亡(秀島経一書簡)	佐賀県	
明治31年2月	1898	48歳	綿路美彌・梨岡・子孫編成など終了し、東京に帰り報告を行う(履歷書)		
明治31年3月	1898	48歳	任務終了により台湾鉄道会社台北事務所総務を辭任(履歷書)		
明治31年6月17日	1898	48歳	佐賀市第一級議員に当選(佐賀市史上巻)		
明治32年6月	1899	49歳	商法施行条例第三十五条により三度服官職人を命ぜられる(履歷書)		
明治32年10月26日	1899	49歳	佐賀市長就任(二期目) 年齢50才(佐賀市史第四巻)		
明治33年頃	1900	50歳	佐賀市長就任(二期目) 年齢50才(佐賀市史第四巻)		
明治33年12月	1900	50歳	日本赤十字社特別社員に列せられる(履歷書)		
明治35年	1902	52歳	成美女学校商議員就任(佐賀市史上巻)		
明治35年11月	1903	53歳	佐賀県に佐賀市立商業学校設立につき県費補助の請願書を提出(佐賀市史第三巻)		
明治36年12月2日	1903	53歳	宇田力次郎、中野政明とともに大郡電気会社の地田牧師を招いて電気理論の経済性についての講演会を開く(佐賀県の日)		
明治38年10月25日	1905	55歳	佐賀市長就任(三期目) 年齢50才(佐賀市史第四巻)		
明治39年2月14日	1906	56歳	佐賀市長就任(三期目) 年齢50才(佐賀市史第四巻)		
明治39年3月11日	1906	56歳	第12回九州沖龍大仏運命奉進会において祝辞を述べらる(佐賀市史第三巻)		
明治39年4月1日	1906	56歳	明治27・28年事件(日露戦争)の功により勲六等旭日章及ひ金100円を授け賜る(履歷書)		
明治39年4月23日	1906	56歳	佐賀商業学校開校により市長として管理者になる。(佐賀県教育史第四巻)		
明治39年冬	1906	56歳	佐賀長官(第五十五通號)設置につき前副長及び関係者のため上京、志望を遂げ退職意向に関して敬請を伺う(履歷書)		
明治40年4月18日	1907	57歳	上京宮内省正主事において、中林梧竹・佐賀藩家来法濟・市会議員稲浦守次郎等と梧竹翁振益会の相談をする(故中林梧竹翁略年譜)		
明治40年4月23日	1907	57歳	石丸一家(勝一・有子・秀子)・中林梧竹・熊谷夫妻等8人と小坂公園を遊覧し、皇藏寺にて支那料理を食へる(故中林梧竹翁略年譜)		
明治40年6月15日	1907	57歳	役員改選により佐賀市教育委員会頭に就任(佐賀県教育史第二巻)		
明治40年7月15日	1907	57歳	中林梧竹の招待で龍宮堂建立地を視察後、松岡公明内五田閣にて筆を共にする(故中林梧竹翁略年譜)		
明治42年4月	1909	59歳	知事西村陸奥夫を訪問し、下賜された香竹の保管方法について、梧竹・熊谷法濟とともに佐賀県内知事梧竹翁略年譜)		
明治42年10月	1909	59歳	佐賀市長就任(三期目) 勤続年数3年8ヶ月(佐賀市史第四巻)		
明治43年1月12日	1910	60歳	帝國海軍協会理事長より帝國海軍協隊隊建設佐賀県地方委員としての協力に対し感謝状が贈られる(履歷書)		
明治43年3月	1910	60歳	東京に籍在中、友人・武富善吉より創設における商店及び銀行業務の整理を依頼される(履歷書)		
明治43年3月4日	1910	60歳	武富善吉の商店及び銀行において整理事務に従事する(履歷書)		
明治43年4月	1910	60歳	佐賀米穀取引所株主総会において理事に当選し、五選の兼務理事長となる(履歷書)		
明治44年	1911	61歳	肥筑の野において発行せられる大演習に際し、佐賀県より天覧に供し奉る刀劍演習の鑑定を命ぜられる(履歷書)		
大正2年2月15日	1913	63歳	佐賀米穀取引所理事長を辭任(履歷書)		
大正3年4月27日	1913	63歳	中林梧竹の招待で龍宮堂建立地につき看屋入願い入れの申で訪問、翌月に祝辞を得る(故中林梧竹翁略年譜)		
大正2年7月3日	1913	63歳	中林梧竹より、百円借金の申込みを受ける(梧竹宛書簡)		
大正2年7月12日	1913	63歳	午後3時半頃、付き添い3名を隨へて中林梧竹が石丸邸を訪問(故中林梧竹翁略年譜)		
大正3年春	1914	64歳	東京及び北海道の間に遊歴し、実業に従事する(～大正6年まで)(履歷書)		
大正5年	1914	66歳	徳島県民とともに中林梧竹の墓碑を建立(三日町町史下巻)		
大正5年3月	1916	66歳	二佐賀市団務局長伊東春蔵らとともに肥前史談会の発起人となる(佐賀市史第四巻)		
大正5年7月	1916	66歳	地所株式会社常務取締役就任(佐賀市史第四巻)		
大正5年11月	1918	68歳	忍力梅酒造株式会社設立を賛助し、創立総会において監査役となる(履歷書)		
大正5年4月	1919	69歳	博多商業株式会社設立を賛助し、創立総会において監査役となる(履歷書)		
大正5年7月	1919	69歳	株式会社神岡実業銀行株主総会において監査役となる(履歷書)		
大正7年	1920	70歳	娘・秀子、舅の婿村久彦(株・松子長男)と結婚		
大正10年	1921	71歳	株式会社神岡実業銀行臨時株主総会において取締役兼監査役に選ばれ就任する(履歷書)		
大正10年	1921	71歳	島島侯爵邸に際し、春日御墓所に御遊覧を拝奉することを経験(履歷書)		
大正11年8月21日	1922	72歳	死去(年譜)		

永・江副らが中心となった「市制派」が勝利を収め、明治二十二年（一八八九）に市制施行となった。初代市長には石丸源作が就任し、勝一は初代助役に選出されている。助役時代の勝一が携わった事業としては、佐賀市の水道計画があげられる。内務省に技師を派遣してもらい設計まで行ったが、豊富な河水を飲料水としていた市民から水道実現を望む声は少なく、結果としては見送りとなっている。その後、六代市長在任時の明治四十一年（一九〇八）にも川上川の推量調査と設計を行ったが任期途中の辞職より計画は頓挫しており、ようやく完成したのは大正五年（一九一六）のことであった。

二年九ヶ月にわたり佐賀市の助役を務めた勝一は石丸源作初代市長の健康上の理由による辞職に伴い、第二代佐賀市長に就任することとなった。このとき勝一は四十二才、最も働き盛りの時期である。在任中は貧児寮設立の計画を推進し、コレラ流行時には検疫官として事態の収束に努めた。しかし、在任四年目の明治二十八年（一八九五）に市吏員による鍋島家寄付金横領事件が起こり、その責任をとって市議会に辞表を提出、翌明治二十九年（一八九六）二月に志半ばでの辞任となった。

#### （五）市長（第一期）退任後、市長（第二期）時代

市長を辞任した勝一は、明治三十年（一八九七）、台湾鉄道会社の囑託により、この二年前に日本領となったばかりの台湾に渡るようになった。台湾鉄道会社は台湾縦貫鉄道の建設を目的として華族・資産家の発起により計画された会社であり、勝一は台北事務所詰総務として線路実測・製図・予算編成の任にあたった。渡台中に娘のさちが急性腸カタルにより死亡するという不幸にも見舞われたが任務を遂行し、明治三十一年（一八九八）

に調査結果の報告を終えて帰国の途に着いている。

帰国後は佐賀市会議員に当選し、翌明治三十二年（一八九九）に四十八才で再び第五代佐賀市長に就任している。在任中は成美女学校の商議員に就任、佐賀県会に佐賀市立商業学校設立の県費補助請願を提出するなど、商業教育の振興に尽力しており、これは明治三十九年（一九〇六）、佐賀商業学校の開校という形で結実している。

#### （六）市長（第三期）と退任

勝一の佐賀市長二期目は、明治三十八年（一九〇五）十月をもって六年間の任期満了となった。これにより後任市長推薦のための佐賀市会が開かれたが、後任選びは勝一を押し江副を中心とする「旧議員派」と、横尾純喬を押す新人議員が中心の「進歩派」「実業派」との間で対立が起こり混乱を極めた。勝一はこの間四ヶ月にわたり野にあったが、佐賀市会議員選挙



石丸勝一肖像写真（「佐賀県官民肖像録」より）

を経て「旧議員派」が勝利を収め、明治三十九年（一九〇六）二月に第六代・三期目の佐賀市長に就任することとなった。

勝一は市長に就任すると、その年の冬には佐賀兵營設置の請願及び陳情の為に上京し、設置決定を獲得している。また任期中に佐賀市教育会会頭にも就任しており佐賀の教育発展を推進した。そして明治四十二年（一九〇九）に勤続年数三年八ヶ月で市長を退任、三期延べ十二年間の市長生活を終えた。この時五十九才であった。

#### (七) 市長退任後から晩年まで

市長を退任し、既に還暦間近の勝一であったが彼の場合はずぐに隠居とはいかなかった。退任翌年の明治四十三年（一九一〇）三月には、友人の武富善吉<sup>7</sup>に釧路における商店及び銀行の整理業務を依頼されている。武富は佐賀出身で明治初期に北海道に移住して開拓に貢献した人物であり、明治四十年（一九〇七）に釧路銀行を設立している。釧路での約一ヶ月の滞りの後、五月には任務を終えて佐賀に戻ったが、休む間もなく同年九月には佐賀米穀取引所理事長に就任し、その後二年半の間その職にあった。

このように、勝一の実業家としての活動は晩年に活発になっている。判明しているだけでも、大正七年（一九一八）に地所株式会社取締役・窓乃梅酒造株式会社監査役、大正八年（一九一九）に博多窯業株式会社監査役、大正十年（一九二二）に神埼実業銀行取締役<sup>8</sup>に就任しており、まさに「生涯現役」であった。

さらに勝一の政治家・実業家だけではなく、文化人としての側面も見逃すことはできない。特に刀剣書画には造詣が深く、明治四十四年（一九二一）に佐賀で行われた陸軍大演習では佐賀県より天覧に供する刀剣書画の

鑑定を命じられている。また、佐賀出身で「明治の三筆」と謳われた中林梧竹<sup>8</sup>とも交流があり、佐賀市の願正寺において揮毫会などを主催している。梧竹とは私的交流も深く、家族を伴っての食事や梧竹帰郷の際の世話を行っている。梧竹死去の際には葬儀委員長を務め、翌年の大正三年（一九一四）には徳広源吉と共に梧竹の墓碑を建立している。

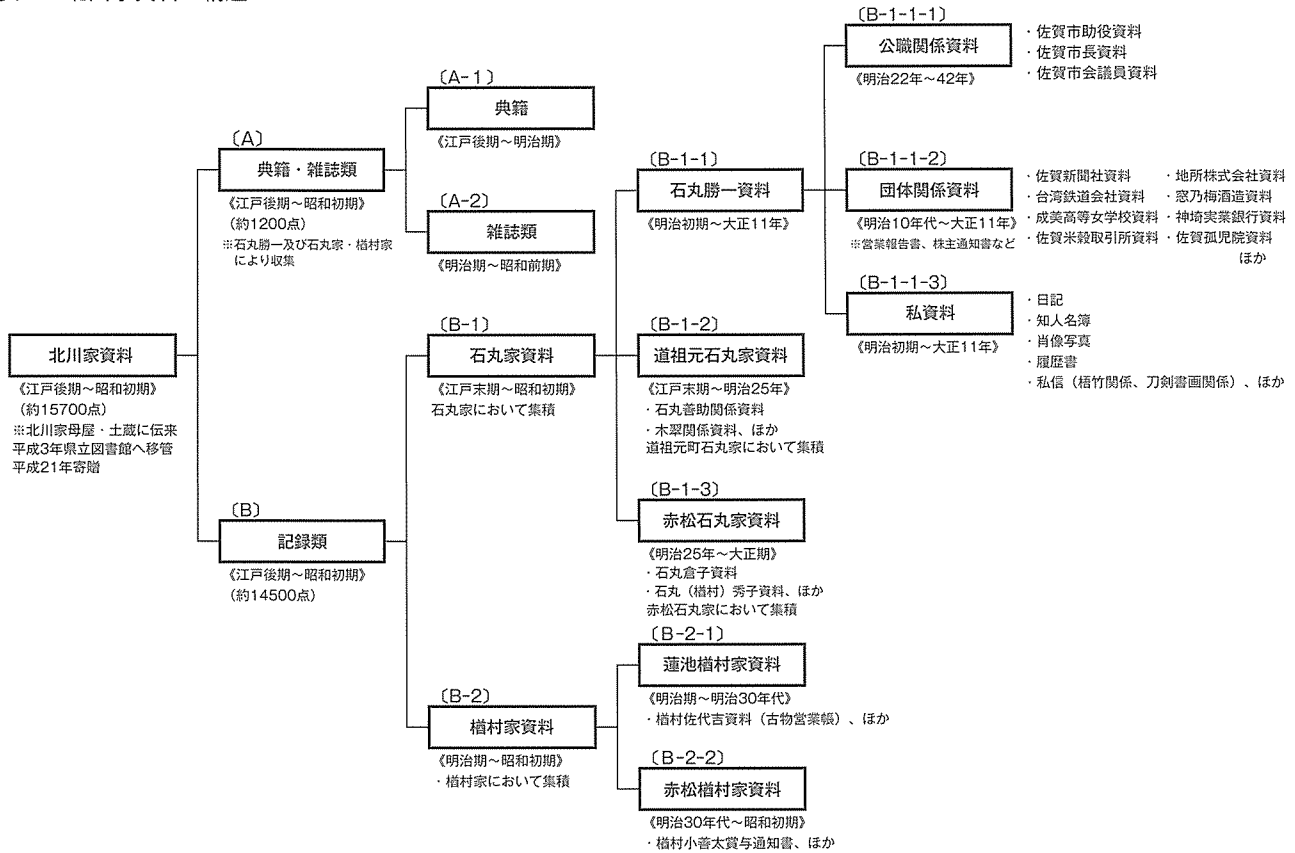
大正九年（一九二〇）、勝一は七十才となり古希を迎えた。この年に娘の秀子と甥の榎村小善太が結婚している。年老いてからの娘の結婚に安堵したのか、二年後の大正十一年（一九二二）八月、勝一はついに死の床につき、八月二十一日に死去した。最期まで家族に自分の死後の手続きについて指示を行っていたという。葬儀では、衆議院議員の副島義一が弔辞を読み、「先進ノ模範ヲ失ヘル吾人後進者ハ実ニ最慕ト悲哀ノ情ニ咽ハサルヲ得サルナリ」とその死を惜しんだ。幕末から明治・大正を生きた七十二年の生涯であった。

### 三、北川家資料について

#### (一) 資料の概要

前項で見たように、石丸勝一は佐賀・東京・台湾・釧路などを舞台に政治家・実業家・文化人として様々な活動を行った。勝一の死後はその活動に関わる多くの資料が残されたが、北川家資料は、これに石丸家・榎村家の資料を加えた江戸後期から昭和期にわたる約一万五千七百点の膨大な資料群である。資料は後に北川家となる榎村家の土蔵・母屋において長く伝来していたが、平成三年（一九九二）に台風の被害のため保存が困難となり、同年十月と翌四年（一九九三）十月の二回に分けて佐賀県立図書館へ

表2 北川家資料の構造



移管された。全体の概要については、前回紹介したので詳しくは述べないが、木箱・ダンボール箱など四十箱に収納されていた。これまでに調査の手が入っていないこともあり、全体的に当時の保存状況がよく残されており、特に書類については、勝一自身が生前に整理したままの状態で見られている。これにより、年代・内容が不明の資料であってもある程度の推定が可能となっている。

(二) 資料の構造

北川家資料の構造については、その性質の違いから大きく二つに分けることができる。伝来の過程で収集された典籍・雑誌類〔A〕と旧蔵者の諸活動により作成・收受された記録類〔B〕である。さらに〔B〕は、発生契機の違いから「石丸家資料」と「榎村家資料」に分類することができる。以下、項目ごとの説明を行うこととする。

〔A〕 典籍・雑誌類

北川家資料の典籍・雑誌類は江戸後期から昭和期までの約一千二百点で構成されている。その内容は歴史・宗教・美術など多岐にわたる。「典籍」では江戸期に出版された資料が多く、石丸善助以前に収集された資料も見られるが、大部分は勝一によって収集されたものと考えられる。前回紹介した『續五明題和歌集』、『小學句讀口義詳解十三卷』、『泰巖公譜』のような貴重資料が多く含まれている。「雑誌類」には、勝一が造詣の深かった書画刀剣に関する書籍、仏教に関する雑誌などがある。その他、勝一死後の昭和期の書籍が約六十点存在するが、これは榎村家において収集されたものであると考えられる。

〔B〕記録類

〔B-1〕石丸家資料

石丸家資料は、北川家資料のうち石丸家において作成・收受された資料であり、北川家資料の大部分を占める。点数は約一万四千点で「石丸勝一資料」、「赤松石丸家資料」、「道祖元石丸家資料」に分類することができる。

〔B-1-1〕石丸勝一資料

石丸勝一資料は、勝一の青年期にあたる明治初年から死去する大正十一年（一九二二）にわたる石丸勝一個人の諸活動により作成・收受された資料である。大きく「公職関係資料」、「団体関係資料」、「私資料」に分類することができる。

「公職関係資料」は、勝一が佐賀市助役・佐賀市長・佐賀市会議員の公職にあった時代の資料である。助役に就任した明治二十二年（一八八九）から三期目市長を退任した明治四十二年（一九〇九）までの二十一年間に作成・收受されている。主なものでは、佐賀市の予算書、市長任命証、市会議員・県会議員・国会議員よりの書簡、市長就任時に全国市長から届いた祝状などがあり、当時の佐賀市政を知ることができる資料が多く含まれている。

「団体関係資料」は、勝一が所属した団体に関する資料である。明治九年（一八七六）の「松風社」への入社を皮切りに、佐賀新聞社や多くの銀行・株式会社において幹部や役員を務めている。多くは株主総会案内状や株式配当通知書・営業報告書などであるが、中には金銭収納簿や資産書など団体の経営に関する資料も残されている。

「私資料」は勝一の私生活において作成・收受された資料であり、日記・知人名簿・私信などである。日記は佐賀市長に就任した明治二十五年（一

八九二）から死去する大正十一年（一九二二）のうち、約二十年分が残されている。その日の天気、起床・就寝時間、来訪者と訪問先などが詳細に記録されており、勝一の動向を詳しく知ることができる。また、私信は家族・親戚とのやり取りや趣味に関するものなど多彩である。中でも中林梧竹の書簡は二十一通残されており、内容から勝一と梧竹の親密な交流の様子を知ることができる。<sup>10)</sup>

〔B-1-2〕道祖元石丸家資料

石丸家は明治二十五年（一八九二）、佐賀市長就任の年に佐賀市道祖元町から同市赤松町に転居しているが、この資料は転居前の道祖元町石丸家において作成・收受されたものである。転居時に選別がなされており数は少ないが重要な資料が多く含まれている。内容としては大きく「石丸善助関係資料」と「木翠関係資料」に分類することができる。

「石丸善助関係資料」は、勝一の父・善助に関する資料である。石丸家の由緒に関するものと、善助の商売に関わる証文や覚などからなり、幕末から明治初期の資料が多い。

「木翠関係資料」は、幕末の石丸家の人物「木翠」に関する資料である。主に俳諧関係の資料からなっており、「木翠」は俳号であると考えられる。木翠が石丸家のどの人物であるかは不詳であるが、若くして亡くなった勝一の兄・平太郎である可能性が高い。<sup>11)</sup> 木翠は須古（現・佐賀県白石町）出身の俳人・太平窟木人の弟子であり、資料には木人や同門の俳人から送られた俳諧、句集が多く含まれている。佐賀の俳壇を知る上で貴重な資料であるといえる。

〔B-1-3〕赤松石丸家資料

赤松石丸家資料は、佐賀市赤松町の石丸家に居住していた勝一の妻・倉



子と娘・秀子に関する資料である。石丸倉子は慶応三年（一八六七）の生まれであり、勝一とは十六歳の年齢差がある。勝一との結婚時期については現在のところ不明である。倉子は市長夫人として愛国婦人会などの佐賀支部役員を務めており、それらの活動に関する書類が多くみられる。

#### 〔B-2〕 榎村家資料

榎村家資料は、「蓮池榎村家資料」と「赤松榎村家資料」に分類することができる。榎村家は勝一の妹・松子と娘・秀子が嫁いだ家であり、後に北川家となった家である。榎村佐代吉時代の明治三十年代までは神埼郡蓮池村にあった。佐代吉の長男・小善太（秀子の夫）は銀行員として川崎銀行・東洋拓殖銀行などに勤務し、後に赤松の榎村家に居住している。「蓮池榎村家資料」には、佐代吉の時代に榎村家が営んでいた古物商に関する営業帳や榎村家宛の書簡などが残されている。「赤松榎村家資料」には、榎村小善太の給与・賞与の通知状などが残されており、小善太の経歴を知ることができる。点数はごく僅かであるが、これは平成三年（一九九三）当時には移管の対象にならなかった為であると考えられる。

#### 四、おわりに

以上、本稿では前回に引き続き、佐賀県立図書館の北川家資料整理により判明した石丸勝一の経歴及び、資料の構造について報告を行った。石丸勝一の経歴では、勝一の佐賀市長としての経歴のほか、青年期の活動、実業家・文化人としての側面までを七期に分けて紹介を行った。また、資料の構造については、発生の契機・内容・伝来形態などを基に分類を行った結果、幾つかの異なる性質をもった資料が存在していることが判明した。

今後、佐賀県立図書館により目録が整備される予定である。

最後に、佐賀大学地域学歴史文化研究センターの伊藤昭弘准教授には調査において御助言と御指導を賜った。また、図書館サポーターである大石知己、永松亨、山本美子、箕輪薫、平川由佳理・塩山十百実各氏には資料の解説・整理において御協力を頂いた。ここに記してお礼申し上げたい。

#### 【註】

- (1) 佐々木盛行「元佐賀市長・石丸勝一と願正寺住職・熊谷広済」、『中林梧竹』西日本文化協会、一九九一年）三〇五～三〇九頁
- (2) 『嘉永七年寅三月 道祖元町竈帳』に「煙草屋其外 四十四才石丸善助」との記述が確認できる。三好不二雄・三好嘉子編『佐賀城下竈帳』（九州大学出版会、一九九〇年）九一九頁に翻刻掲載されている。
- (3) 田村貞雄「秋月の乱における他地域士族との連携」、『福岡県地域史研究』第二十四号、二〇〇七年）の「二 佐賀士族と萩の前原との事前協議」において、具体的経緯が述べられている。
- (4) 弘化元年～明治二十三年。佐賀藩士として戊辰戦争に参加し、佐賀県参事、水戸裁判所長などを歴任した。佐賀の乱後に帰郷し松風社を起して民間の振興に努めた。
- (5) 嘉永五年～明治九年。前原一誠の三弟、萩藩校明倫館に学び松下村塾で経史を講じたといわれている。萩の乱に加わり斬罪となった。
- (6) 嘉永四年～大正四年。佐賀郡諸富村大堂生まれ。市会議員、県会議員を経て、明治四十五年に衆議院議員となる。その他、起業社、佐世保新聞社などを経営した。
- (7) 天保十年～明治四十四年。武富平作の甥。半官半民の商社「広業商会」を設立し、中国向けに昆布輸出を行った。後に鉦路銀行を創設した。
- (8) 文政十年～大正二年。号は梧竹。少年の頃から書を好み、若くして江戸に出て、山内雪秀や市河米庵の門に学んだ。明治十五年、清国に留学。同三十年に北京大学翰林院の額を書く。晩年は、三日月村に「梧竹村莊」を営み多くの書を残す。
- (9) 拙稿「北川家資料調査について」、『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』第四号、二〇一〇年）



- (10) 野口禎子「新発見の中林梧竹書簡の紹介」〔小城市立歴史資料館・小城市立中林梧竹記念館調査報告書〕第四集、二〇一〇年
- (11) 石丸平太郎は嘉永七年の『道祖元町竈帳』では「十二歳」で記載があるが、明治七年の「戸籍届」では名前が見られない。木翠の追善句集「木々の葉」が出版された明治三年には二十六歳であり、若くして亡くなった石丸家の人物としては最も適当である。
- (12) 池田賢士郎『評伝 鶴田淡雪』評伝鶴田淡雪刊行会、二〇〇九年）Ⅲ淡雪と俳句  
（一）6長瓢とたむぎく」一〇〇～一〇三頁

（佐賀県立図書館資料課郷土調査担当）